

【様式】

平成30年度 学校マネジメントシート

学校名 (四日市農芸高等学校)

1 目指す姿

(1) 目指す学校像		共通教科並びに専門教科を通じた教育活動の充実に努め、専門技術者（スペシャリスト）を育成するとともに、心豊かな人間性を育み、地域社会に貢献する人材を育成する学校
(2)	育みたい 児童生徒像	○農業科目や家庭科目への興味・関心を持ち、将来のスペシャリストとして、その進路実現のために専門的な知識・技能の習得をすすめている。 ○自ら進んで挨拶し、コミュニケーションをとることで、公共心、規範意識、人間関係を築く力、自尊感情を高めている。
	ありたい 教職員像	○目指す学校像実現に向けて、様々な場面において情報共有と意思疎通を図る教職員 ○生徒の無限の可能性を信じ、生徒に寄り添いながら自らも成長しようとする教職員

2 現状認識

(1) 学校の価値を提供する相手とそこからの要求・期待		<p><生徒> 専門的な知識や技術の習得、進路希望の実現、人格形成</p> <p><保護者> 安全安心な学校生活の保障、規律ある生活習慣の確立</p> <p><地域住民> 地域の活性化、学校施設の提供、地域防災の拠点</p>
(2) 連携する相手と連携するうえでの要望・期待	連携する相手からの要望・期待	
	<p><保護者> 生徒が明るく生き生きと目標に向かって努力する。自己実現・進路実現、学校からの情報発信</p> <p><地域住民> 交流の場としての協力、地域行事への協力、地域開放講座などの実施</p> <p><同窓会> 歴史と伝統のある学校としての実績、地域社会に貢献する有能な人材育成</p> <p><大学等や産業界> 有能な人材育成への期待</p>	連携する相手への要望・期待
(3) 前年度の学校関係者評価等		<ul style="list-style-type: none"> ・学校と地域の連携は、特に高齢化している地域の活性化という視点からも有効な手法である。地域住民の中には、本校との連携を知らない人も依然として多い。今後も本校の特色を活かし、地域連携を発展させていくべきである。 ・中学校卒業生の減少もあるが、本校への入学者選抜志願者数が減少傾向にある。本校には、北勢地域唯一の農業・家庭科専門高校として、スペシャリストの育成はもちろん、将来の地域を支える人材育成という大きな役割がある。そのためにも、他校にはない強みを活かした魅力ある学校づくりを進め、志願者の増加を図るべきである。 ・本校の伝統である何事にも一生懸命、素直に、真面目に取り組むという学校文化を職員全員が自信を持って継承していく必要がある。あいさつやマナー指導も引き続き徹底し、さらなるイメージアップに努めるべきである。
(4) 現状と課題	教育活動	<ul style="list-style-type: none"> ・目標を持って学習や部活動に前向きに努力する習慣が醸成されている。 ・校内での合言葉である「挨拶は農芸の心」が学校文化として浸透し、何事にも真面目に素直に取り組もうとする豊かな心が育まれている。 ・農業教育、家庭科教育をすすめる上で、更なる校内施設設備の充実が必要である。
	学校運営等	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や産業界との連携が年々充実する反面、地域からの要望過多により教職員の多忙化や業務の困難化を招いている。 ・総勤務時間の縮減に向けて、業務の簡素化・効率化を図るとともに、生徒と向き合う時間を確保する工夫が必要である。

3 中長期的な重点目標

教育活動	<ul style="list-style-type: none"> ・将来のスペシャリストの育成と地域連携やインターンシップ等の活用を通して、より実践的な学習活動を展開する。 ・基礎学力の充実と専門教科指導を強化し、生徒一人ひとりが持つ能力を引き出し、希望の進路実現につなげる。 ・心の教育や部活動を通して、規範意識を醸成し、生徒の自主性や個性の伸長を図る。
学校運営等	<ul style="list-style-type: none"> ・中学卒業生徒の減少傾向が進む中で、中学生やその保護者にとって魅力のある学校づくりに務めるとともに、学校の将来構想・展望に関する検討をすすめる。 ・専門高校の特色を活かした進学に向けた指導体制を確立する。 ・教育相談や特別支援教育充実のための体制作りをすすめる。 ・組織の業務内容の見直し、総勤務時間の縮減に取り組む。

4 本年度の行動計画と評価

(1) 教育活動

項目	取組内容・指標	結果	備考
学習指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を充実し基礎学力の向上を目指す ・生徒一人ひとりが納得いくコース選択を目指す ・多面的な学習指導を実施するために図書館を活用する <p>【活動指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○各学年団および進路指導部・教科と連携し、基礎学力診断テスト、基礎学力テスト、進路模試を実施する ○生徒が納得するコース選択のため、各学科・コースと連携して説明会を持つ ○授業を充実させ、最大限の授業変更の努力をし、自習時間を減らす <p>【成果指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○成績不振による原級留置者をゼロにする ○検定合格・資格取得者数のべ1400名（1人2つ以上） ○図書館を活用した授業50時間以上、生徒一人あたりの貸し出し冊数5冊以上 	<p>1 学年で基礎学力テスト年間11回実施、不振生徒の補習実施、進路模試、基礎学力診断テスト等の利用で一定の基礎学力の充実が図れた。HR等で学業生活両面から生徒の学校生活の支援を実施した。検定試験延べ1762名の合格者を出した。コース選択は適宜、面談を行い意思疎通を行った。成績不振者等原級留置者が進路変更を含めて1,2学年で複数生徒が該当した。適切な支援をした中での結果だが、引き続き継続した就学支援の必要があると判断する。</p>	
進路指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・進路に対する意識を高め、一人一人の進路実現に向けた指導に取り組む ・企業との連携を深め就職先の安定確保に努める ・専門性を活かした進学指導を強化する ・中学生やその保護者にとって将来の進路を考えたとき、本校に入学したいと思える出口対策に努める <p>【活動指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○1学年－勤労観を育み自己理解を深める指導を行う ○2学年－総合的な学習の時間を通し、自己の実現に向け自主的な行動ができる能力を養い、進路の意思決定ができることを目指す ○3学年－進路決定に向け学年と協力し進路未決定者ゼロを目指す ○学年・学科との連携を強化し、主に四大進学希望者への早期からの指導を行う <p>【成果指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○1年の進路講話を4回以上実施 ○各学年進路希望調査を年2回実施 2・3年生は1回以上の個人面談実施 ○進路広報誌「あすなる」を1年3回2年5回3年8回以上発行 ○学年、学科と連携し150社以上の企業訪問を行う。生徒は3社以上の企業見学実施 ○3年校外模試を3回実施 ○国公立・難関私立大学への合格者10名を目指す 	<p>進路指針として1学年17回学年通信発行、年間5回学年集会等実施</p> <p>2 学年 総合的な学習の時間等により全生徒のインターンシップが実現し修学意欲の向上が図れた。</p> <p>3 学年 進路希望未決定者ゼロが実現した。その中で三重大学2名など第一希望の進学先を決めた生徒が多かった。個人面談や進路講話は予定通り実施し、生徒の多様な進路希望の実現に貢献ができた。全般的に学年や学科・コース等の専門性とも連携し好調な進路決定につながった。</p> <p>就職 64.2% 四年生大学 5.2% 短大 9.2% 専門学校 21.0% その他 0.4% 難関大学合格 10名は未達成</p>	

<p>生徒指導の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常的な校内美化指導、環境教育を指導する ・ 担任と生徒指導部の連携強化を図る ・ 組織的な生活指導を通じて生徒の問題行動の抑止を図る ・ 日常の挨拶の徹底と、生活マナーの大切さを指導する ・ 部活動や学校行事への積極的な参加を促す <p>【活動指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 月例の生活点検を実施する ○ 毎日の登校指導等を通じて挨拶の励行を図る ○ 環境デー、校外清掃ボランティア等を実施する ○ 部活動を充実させる。 <p>【成果指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 月例生活点検合格者 90%以上、再点検合格者 100%を目指す ○ 全教員の 100%が生徒に対しての声掛けが出来ていると感じることを目指す ○ 全生徒・教職員の 80%以上が挨拶は出来ていると感じることを目指す ○ 全生徒・教職員の 80%以上が状況に応じた言葉遣いができていると感じることを目指す ○ 生徒会行事を良かったと感じる生徒が 85%以上 ○ クラブ加入率 70%以上 ○ 環境デー校外作業への参加生徒が全校生徒の 70%以上 	<p>継続的な指導と ISO14001 等により、計画的な美化活動、環境教育の指導ができた。また担任と生徒指導部との連携も学校としての一体的な指導体制は維持できた。反面生徒、保護者一部から学年による「偏り」の指摘があり引き続き理解を求めたい。生徒のマナー「挨拶は出来ていると感じる」87%部活動については、クラブ加入率 90.4% 等比較的充実した結果となった。生活指導においては、理由なし遅刻 19 件、月例生活点検合格者 86%、再点検 99%で目標未達成となった。その他の指標として、挨拶、言葉遣い、生徒会活動、環境デー参加など、ほぼ生徒の指標は達成したが、教職員が未達成だった。教職員からの率先垂範と保護者に理解を求めるため家庭訪問の重要性を再認識したい。</p>	
<p>農業教育の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 専門科目における資格を推進し、将来の進路に向けた学習意欲の向上を図る ・ 農業教育を充実させ、関連分野への興味関心の向上を図る ・ 農業クラブ活動を充実させる ・ 専門性を活かす進路先の確保のための企業開拓、各機関との連携を図る ・ 農業教育の推進のため適切な施設設備の活用、更新を図る <p>【活動指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 専門教科を通じて、資格取得講座の開設及び指導を行う ○ インターンシップ、ファームステイ等への取り組みを促し、農業関連分野へ興味関心を深める ○ 生徒の安全を第一とした実習・実験を行い、GAP についての取組を学校農場を通じて推進する ○ 生徒の希望に応じたコース決定指導を行い、ガイダンス、面接等でミスマッチの無いよう配慮する ○ 老朽化した施設設備の改修と予算化を要請、計画実施する <p>【成果指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 推奨する資格取得者、延べ 300 名以上 ○ 職業教育顕彰 15 名以上、アグリマイスター顕彰 20 名以上 ○ 農業クラブ競技会において、県大会で最優秀を 4 つ以上、東海大会で優秀賞を 2 つ以上、全国大会で優秀賞 4 つ以上 ○ GAP 認証への取り組みを推進し、2 つ以上の認証取得と生徒の 80%以上が周知 ○ コース選択満足度 80%以上、学習環境での生徒満足度 90%以上を目標とする ○ 各種イベント、出前授業、地域開放的な取り組みを積極的に行い、地域に根ざした学校づくりを行う 	<p>資格取得は 288 名と昨年度の 313 名より減少した。職業教育顕彰 28 名アグリマイスター 26 名は昨年度より増加し、顕彰制度の定着化が進んだ。農業クラブ県大会ではプロジェクト発表で 2 部門が最優秀に入賞。全国大会ではプロジェクト発表 1 チーム参加、農業鑑定で優秀賞 3 名が入賞。</p> <p>GAP 活動においては GLOBALG.A.P を 11 月に、ASIA GAP を 3 月に認証取得。</p> <p>全国総体でのプランター制作、式典会場の造園装飾を担当し、好評価を得た。資格取得の取得者については減少の傾向にあるが、職業教育顕彰、アグリマイスター（全国入賞 4 名）の受賞者は増加している。顕彰制度の定着化は進んでいるが、資格取得に取り組む生徒を増やす啓発が必要。GAP については 2 つを認証・取得、関連し酒造にも取り組むことができた。今後について認証・取得を継続についての問題、GAP 教育を教科内に、また直接取り組みに関わっていない生徒たちにどのように浸透させていくかが課題である。</p>	

<p>家庭科教育の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的な技術を向上させ、各種コンクール・ショーに入賞できるよう指導する ・家庭クラブ員としての自覚を持たせ、生活文化科の生徒全員が積極的に活動を行う。 <p>【活動指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○進学に向けた専門知識の充実を図るために補習授業を行う ○教員が各種講座や研修会へ1回以上参加し、専門知識をより充実させ、授業に還元する。 ○専門科目における資格取得をすすめ、さらに上級の資格取得に取り組む ○地域連携の機会を増やし、なるべく多くの生徒が地域と関わりを持ち、社会マナーの充実を図る <p>【成果指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○家庭クラブ活動の充実度 90%以上を目指す ○資格取得者数延べ 800 名以上を目指す ○社会マナーに関する個別指導の機会を一人につき、2年生に対して1回以上、3年生に対して2回以上、持つ ○地域連携参加生徒の満足度 90%以上を目指す ○将来の進路希望を固めることのできた者 90%以上を目指す 	<p>各種コンクールは、昨年よりも上位の賞を受賞や、新たなコンクールでの入賞もあった。家庭クラブ員充実度は 96%で達成できた。小論文指導・面接指導等により資格取得延べ人数 937人も達成。生徒満足度は満足・ほぼ満足 95%、進路希望達成者 98%で達成できた。個別指導として全3年2回、全2年を1回実施した。家庭クラブの充実は、内容を分かりやすい表現にし、充実度を向上させた。また総会では資料を用いたがイブンスを実施しクラブ員の活動と地域交流と合わせて充実できるよう工夫した。進路は、インターシップや外部講師等地域連携等を利用し指導していきたい。また、社会マナーに関する指導を今後も継続していく。</p>
<p>人権教育の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒・教職員が様々な人権問題を正しく理解・認識するための取り組みを推進する ・校内人権教育推進委員会において人権教育推進計画を作成し、実施することにより人権教育を推進する 	<p>3学年を通じた計画を通じて生徒の健全な人権意識を高めることができた。外部講師を招いての指導やPTAや地域社会を巻き込んだ研修も実施することができた。</p>

改善課題

農業と家庭の専門高校として、北勢地域において歴史と伝統、職員努力により一定の評価を得られていると確信する。特に昨今の中学生の募集が顕著であること、地域の方々の評価もその理由である。しかし少子化及び中学生のニーズの変化に対応するために柔軟な対応が必要である。具体的には、基礎学力の充実を図ること。学力と専門教育をベースにした進路指導の充実を図りたい。生徒指導面では、多少の課題はあるが、農芸魂の根幹である「挨拶」「頑張っている友人を応援する」という命題を通じて浸透していると判断する。農業教育では、国際基準であるGAP認証等、地域産業との連携だけではなく、国際的な視野を見据えた指導が必要とされている。その取りかかりとして取組は始まっているが、一部のプロジェクトだけではなく農業全ての学科において指導するために、教職員が必要な素養を磨くことが重要である。家庭学科においても県内でリーダー学科として認識されているが、より産業としての結びつきと、進路を見据えた進学指導等を進めていきたい。また人権教育においても、最近の諸問題に対応し切れていない感は否めない。とくに情報時代におけるSNS対策などは急務であり、県教育委員会などの指導助言を仰ぎながら、保護者との意思疎通を含めて進める必要がある。

(2) 学校運営等

項目	取組内容・指標	結果	備考
働きやすい環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・総勤務時間の縮減に向けて、働き方改革に取り組み、働きやすい環境をつくる。 【活動指標】 ○定時退校日（定期考査1日目） ○部活動休養日（週1日以上） ○放課後に開催され60分以内に終了する会議の割合80%以上 【成果指標】 ○休暇取得日数の促進（昨年度比年間1日増） ○時間外労働時間15%削減、総勤務時間3%縮減（昨年度比） ○月80時間を超える時間外労働者を延べ5人削減 	<p>定時退校日や部活動休養日などを設け推奨することで、多くの教職員が意識して、17時退校や、時間年休の取得など一定の成果は得た。反面、保護者からの部活動への期待や、学習指導への要求は年毎に増えている感がある。時間外労働時間は35.7時間/一人 36.3時間へ増加し削減目標は達成できず、働き方改革には学校の仕事を減らす必要があると思われる。</p>	
開かれた学校作りと組織運営の充実、情報提供による信頼の定着	<ul style="list-style-type: none"> ・学校説明会、入門講座、農芸祭、各種講習会等、校外から参加する催しの企画運営を見直す。 ・HPの効果的な運用を検討し、最新の情報を発信する ・文書及びHP、絆ネットによりPTA行事や保護者公開の学校行事などの紹介に努め、教職員との共通理解・連携を進める ・PTA理事会を充実させ、PTA行事の改善を図る。 【活動指標】 ○電子掲示板を活用し、情報提供に努め、毎日運用する 【成果指標】 ○学校説明会・高校生活入門講座、農芸祭等の参加者の満足度90%以上 ○HPの更新月1回以上 	<p>学校説明会をはじめとする催し物については、生徒獲得における必要なアイテムであり農芸高校の良さをアピールする機会である。また生徒にとっても楽しみと自己実現を図る行事でもありその見直しは困難であった。PTA行事を含め開かれた学校としての役目は十分になっていると判断する。HPにおいても最新の情報を提供することを心がけて目標達成ができた。</p>	
環境教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・環境教育で「育てたい生徒の力」を共有し、日常の教育活動の中で環境教育を実践する ・地域とのコミュニケーション活動を推進する 【活動指標】 ○校内の委員会に位置づけ組織的に取り組む ○環境マネジメントシステムにおける本年度の実施計画を策定し全職員で共有する 【成果指標】 ○6月に環境週間、10～11月に環境月間を設定し期間中に全教職員が各々の授業で環境教育を実践する ○地域清掃活動を実施する ○全職員協力のもと、ISO14001再認証審査をうけ、環境マネジメントシステムを維持する 	<p>環境週間や環境月間は、ISO14001認証審査を受けていることで自動的に実施執行できるまでに成熟したシステムになっている。今年度新たに再認証審査を受諾したが、あらたに農業高校としてのGAPシステムにおいても同時に構築することになった。やや職員の負担感はぬぐえないが、今年度については組織的に取り組むことができた。</p>	

<p>危機管理体制の充実と生徒・教職員の安全安心を守る取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・危機管理マニュアルにより、危機管理にかかわる訓練を実施し、いざという時に備えられる組織運営を目指す。 ・生徒の各種検診を充実させる ・情報共有を充実させ、保健室利用、学校生活において気になる生徒など担任をはじめ各学年、各分掌との情報の交換・共有を密にし、迅速に対応できるよう連携する <p>【活動指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○必要に応じてスクールカウンセラー・発達障がい支援員につなげ、支援体制を構築する ○再検査等の連絡及びその診断結果の回収を確実にを行う ○保健部研究会等を充実させる <p>【成果指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○年2回の防災訓練を実施する ○内科検診、胸部X線、心臓検診、検尿等の受診率100%を目指す ○再検査の連絡等は100%実施する ○AED講習(職員対象5月：生徒対象7月)を2回実施する ○性教育講座(1学年対象7月)を実施する。 ○保健教育にかかる掲示や保健便り(学期2回:保健委員作成)の発行 ・保健部研究会での発表(2学期末)。 ○食育・食生活指導:農芸祭での食品調理説明会を実施する 	<p>危機管理マニュアルに基づき、学校としての安全安心のシステムが有効に作用していると思われる。生徒支援においては、SSWやSCなどの支援によって、多様な意識や生育歴、多くの問題を抱えた生徒を支えることができた。特に特別支援教育委員会、保健委員会の充実がはかれた。また防災においては、地域との連携が有効に作用し年2回の防災訓練と地域住民とのコラボなどが実現し、県からの表彰なども受けることができた。</p> <p>反面、生徒の安全安心においては担任とのギャップが埋められないケースも発生し、保護者との意思疎通をより深く図る必要を感じている。</p>
-----------------------------------	--	--

改善課題

地域に信頼される学校としての情報発信や地域連携については、今年度も最優先に取り組み信頼を得ていると確信する。環境教育等においても継続した取組は充実している。反面、学校としての多様な取組は教職員の多忙化に直結しており、「働きやすい職場」としてはいえない状況である。特に運動部活動顧問、農業・家庭の専門学習の様々な取組を前向きに行っている教員、家庭や生徒のトラブル解決に追われている担任など疲弊している状態である。できれば学校の健全性を守るためにも、スクラップする仕事を具体的に挙げて教職員の多忙化の解消に取り組んでいきたい。

5 学校関係者評価

<p>明らかになった改善課題と次への取組方向</p>	<p>地域は農芸高校の取組を評価されているが、一部浸透していない場合もある。挨拶等でも場合により評価が分かれる場合もあるようだ。学校関係者会議でも話題になったが教職員が率先して生徒への働きかけを行い、より浸透を図ることが望まれている。また専門教育の充実のために、校内の教材研究や指導力の向上はもちろんであるが、地域社会でのインターンシップ等、より積極的に地域に溶け込み、必要とされる人材の供給と進路先の確保、地域住民の信頼高揚を同時に図っていきたい。</p>
----------------------------	---

6 次年度に向けた改善策

<p>教育活動についての改善策</p>	<p>中学生のニーズに応える学科・コースの教育内容の改善とアピール 新学習指導要領の施行に向けての教科内容の見直しの実施 コース改編などを見据えた教育内容の見直しを組織を通じて検討する。</p>
<p>学校運営についての改善策</p>	<p>学校内組織及び分掌間連携の見直しを実施することで、教職員の多忙化の原因の一つである担当部署による過重労働を防止する。SSWやSC、発達障がい支援員などの活用を今年度以上に活用し、多様な人材による生徒理解と保護者対応を図っていきたい。</p>